

# 文化としての岐阜の都市空間に関する研究・その3

## －歴史的建造物の保全を考える－

Study on urban space of Gifu as culture vol.3  
-From the viewpoint of Conservation of historical buildings-

柳田 良造  
Ryozo YANAGIDA

### Abstract

In a urban space of Gifu the existence of the living space in the multitiered structure that has a historical layer can be read .While solving the historical layer of urban space in Gifu. This study is the paper which let the circumstances concerned with the preservation and revitalization activities of the former Gifu prefectural office building ,and considered the meaning of historical building preservation.

Keyword : 岐阜，歴史的建造物，都市デザイン，保全，景観

### 1. はじめに

日本で旅をしていて歴史上の事件や人物生誕地を記す石碑が現代のビル街の中にポツンと建っている場所に出くわすことがある。石碑があることで歴史上の出来事の地理的位置を確認することができて、その場所の意外性に驚いたりもするが、しかし石碑だけではその事件や人物の歴史舞台を現代の都市の通りで想像するのは相当難しい。やはりその時代の建造物や、一本の木でもよいが当時の環境の何かが残されてないと想像力は歴史の向こうまで働いていかない。そういう歴史上の有名な事象でなくとも、街での暮らしの記憶は通りと建物、大きな樹木などで構成され、道路拡幅や再開発の大きな都市開発事業それらが一気になくなると、記憶喪失の街になってしまう。ここは一体どこだったのだろうかと思うことが起こる。個々の建物もそのひとつひとつが人々の暮らしの記憶の集積装置であって、なくなるとそこでの暮らしの場所と結びついていた記憶のかかなりの部分が失われる。

日本の建築物はまた驚くほど短命である。人の一生よりも建物の寿命の方が短いのである。100年を超えて建つ建築物は限られる。住宅やビル等一般の建物はわずか30年ほどで建て替えられるし文化財級の建物といえども日本の都市では取り壊され危機にさらされることが?々なのである。

本稿は、平成22年（2010）からの旧岐阜県庁舎（現岐阜

総合庁舎）の保存再生活動に関わった経緯を通して歴史的建造物保全の意味を考察した論考である。

### 2. 旧岐阜県庁舎の保存運動のはじまり

その発端は平成21年（2009）12月12日の岐阜新聞の記事である。「旧県庁舎の岐阜総合庁舎解体へ」という見出しの記事で、内容は岐阜県が、かつての県庁舎であった岐阜総合庁舎を玄関ホールや特別会議室など建物の一部を残して取り壊す方針を明らかにした。という記事であった。

日本建築学会東海支部岐阜支所（以下建築学会岐阜支所と略す）の年明け1月の会議でその問題が議論され、結論として保存再生にむけてアピールする何らかのアクションを起こそうということになる。まず社会的に旧岐阜県庁舎の保存再活用の意思表示を行うということになり、2月4日岐阜県庁と岐阜市役所に赴き、建築学会岐阜支所長名で保存要望書を提出した。内容は旧岐阜県庁舎が大正13年（1924）、岐阜出身の著名な建築家である矢橋賢吉を設計顧問とし、県内では最初期の鉄筋コンクリート造の建物であること、内部の玄関ホールや大階段の意匠は大理石張りの優れたもので、建築の文化財的価値は非常に高いのでその保存と再活用を十分に検討していただきたいというものであった。岐阜市長にも要望書を提出した理由は岐阜市が旧岐阜県庁舎隣地の岐阜大学医学部付属病院跡地を購入し新



図1 旧岐阜県庁舎正面外観



図2 旧岐阜県庁舎内部・大階段

表1 旧岐阜県庁舎の保存運動の流れ

2010年(平成22年)

- 2月4日(水) 岐阜総合庁舎(旧岐阜県庁舎)の保存に関する要望書提出(岐阜県知事、岐阜市長宛)  
日本建築学会東海支部岐阜支所
- 3月17日(木) 旧岐阜県庁舎見学会+ワークショップ 日本建築学会東海支部岐阜支所主催
- 6月6日(日)～13日(日)『旧岐阜県庁舎+医学部跡地保存活用計画展』  
日本建築学会東海支部岐阜支所主催[てつめいギャラリー]
- 6月9日(水) 岐阜総合庁舎(旧岐阜県庁舎)に関する意見書提出(岐阜県知事、岐阜市長宛)  
日本建築学会東海支部岐阜支所
- 6月12日(土) 講演会『保存活用のデザイン』金沢工業大学教授 水野 一郎氏  
日本建築学会東海支部岐阜支所主催 [てつめいギャラリー]
- 6月19日(土) 講演会『歴史的建造物保存活用の構造と耐震問題』NPO法人歴史建築保存再生研究所理事林章二氏  
JIA 岐阜会主催 日本建築学会東海支部岐阜支所共催 [てつめいギャラリー]
- 7月23日(金) ワークショップ「旧岐阜県庁舎、残そう活かそう楽しもうパートⅠ」  
イカス(旧)県庁舎の会主催[柳ヶ瀬あい愛ステーション]
- 8月2日(金) 岐阜大学医学部等跡地整備基本計画(案)へのパブリックコメント投稿  
日本建築学会東海支部岐阜支所 イカス(旧)県庁舎の会
- 8月31日(火) 岐阜県武藤総務部長との懇談 イカス(旧)県庁舎の会 [岐阜県庁]
- 9月5日(日) 旧県庁舎コンサート及びワークショップ「旧岐阜県庁舎、残そう活かそう楽しもうパートⅡ」  
イカス(旧)県庁舎の会主催 [旧岐阜県庁舎玄関、中央青少年会館]
- 10月14日(木) 旧岐阜県庁舎見学会 イカス(旧)県庁舎の会主催 岐阜振興局協力
- 10月30日(土) 講演会『官の空間が語るもの-旧岐阜県庁舎の歴史的位置を考える』京都工芸繊維大学大学院教授  
石田潤一郎氏 日本建築学会東海支部岐阜支所・イカス(旧)県庁舎の会共催[岐阜市民会館第一集会室]
- 11月2日(火) 岐阜市武政副市長との面談 イカス(旧)県庁舎の会 [岐阜市役所]
- 12月2日(木) 岐阜振興局との懇談 イカス(旧)県庁舎の会 [岐阜振興局]

2011年(平成23年)

- 2月2日(日) 旧加納町役場庁舎ライトアップ
- 5月14日(日) シンポジウム イカス(旧)県庁舎の会 [てつめいギャラリー]
- 6月11日(日) 講演会+コンサート『地域資源としての近代建築と坂倉準三の仕事』京都工芸繊維大学大学院教授  
松隈洋氏 日本建築学会東海支部岐阜支所・イカス(旧)県庁舎の会共催[岐阜市民会館第一集会室]
- 8月13日(土) 加納町ランタンとコンサート 中山道まちづくり会 イカス(旧)県庁舎の会
- 10月13日(日) 「ぎふレトロ建築めぐり1」NPO法人アートの駅 イカス(旧)県庁舎の会 [長良川おんぱく企画]
- 10月22日(日) 「ぎふレトロ建築めぐり2」NPO法人アートの駅 イカス(旧)県庁舎の会 [長良川おんぱく企画]

市立図書館やギャラリー等の建設を構想しており、そのプログラムに旧岐阜県庁舎の空間再活用が大いに役立つこと、またそれにより非常にユニークな施設になること等の点からである

そういう思いは他の団体にもあったようで、日本建築家協会岐阜会(J I A岐阜会と略す)のメンバーから建築学会岐阜支所に声がかかって、我々も旧岐阜県庁舎の建物についてはその重要性を評価しており、共同で何かアクションを行いたいとの呼びかけがあった。3月4日、建築学会岐阜支所とJ I A岐阜会のメンバーが集まり、今後旧岐阜県庁舎の保存再生の取組で共同していくこと、具体的には6月に建築学会岐阜支所が計画している連続講演会を共催で進めることを確認した。6月は岐阜市議会での新市立図書館建設の計画に関する意志決定の時期なので、あらためて旧岐阜県庁舎の保存問題の世論喚起を行うべく、その戦略として旧岐阜県庁舎の保存活用計画展と連続講演会を6月前半に開催する計画が建てられていたのである。

### 3. 旧岐阜県庁舎の保存再利用計画展

建築学会岐阜支所の旧岐阜県庁舎保存再利用計画は2チームが作業に当たることになった。筆者のグループと岐阜高専のチームである。

筆者のチームの計画案は、まず旧岐阜県庁舎と旧岐阜大医学部の敷地4haを一体に考え、大きな緑地のほとんどの岐阜中心市街地の中での緑の中心核ととらえた。「都市の林」と位置づけた大きな緑地の中に市民ギャラリー・集会室等に再活用した旧岐阜県庁舎とその西側に図書館機能をもつ新設の建物を配置する計画で、ふたつの建物は2階でブリッジでつなぐというものであった。旧岐阜県庁舎の保存

再活用計画では、まず大正13年(1924)竣工の本来の形を取り戻すべく、北側にある戦後の増築部分を撤去し、「山」字型の平面を回復した。旧岐阜県庁舎は日本でも官庁建築としては最初期に位置づけられる鉄筋コンクリート造である。設計顧問の佐野利器は世界で最初に耐震設計論を作りだした人物であり、かれの構造理論を取り入れた設計であった。しかも工事中の大正12年(1923)9月1日に関東大震災が起こっており、旧岐阜県庁舎の構造的な再補強も行われたといわれる。計画では中央部の玄関ホールと大階段、正庁、旧知事室、両端の階段等内部意匠の優れた場所は保存しつつも、他の部分については十分に耐震壁を補強するスペースがあるため、バランスよく壁を入れ現在の構造強度に適合しうる計画とした。

「旧岐阜県庁舎+医学部跡地保存活用計画展」を6月6日～13日の間、岐阜の中心市街地にある元の銀行建築を再生した建物である「てつめいギャラリー」で行った。新聞の取材もあり、様々に取り上げられ、多くの反響があった。それに合わせ連続講演会を6月12日「保存活用のデザイン」金沢工業大学教授水野 一郎氏、6月19日には「歴史的建造物保存活用の構造と耐震問題」NPO法人歴史建築保存再生研究所理事林章二氏を開催した。水野教授は旧岐阜県庁舎と

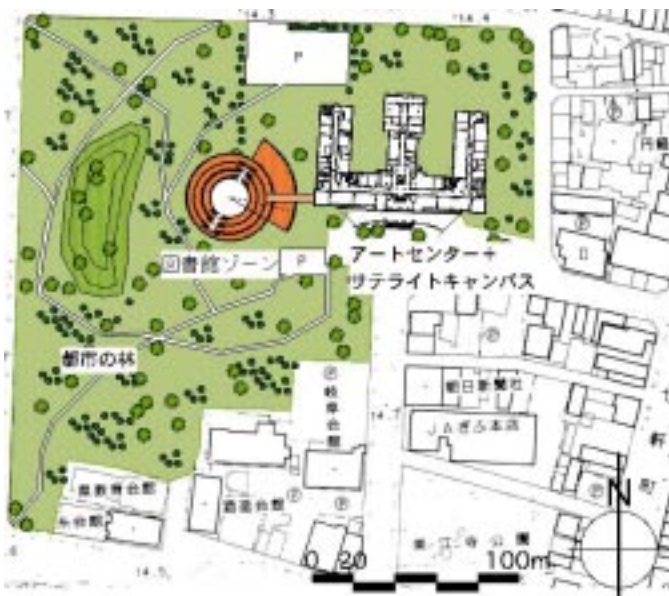


図3 旧岐阜県庁舎活用計画と新図書館計画配置図



図4, 5 旧岐阜県庁舎活用計画と新図書館計画模型写真





図6 2010年6月の保存再利用計画展会場



図7 2010年6月の水野一郎氏の講演会

同年に同じ建築家の設計で建てられた旧石川県庁舎が、2010年春に「石川県政記念しいのき迎賓館」として保存・再生された経緯を話したが、その内容は岐阜の場合に大変参考になるもので興味深いものであった。大きな刺激を受け、「石川県政記念しいのき迎賓館」をその後、直ぐに見学に行ったほどであった。

#### 4. 旧岐阜県庁舎の保存問題と岐阜市立図書館コンペ

6月の保存再利用計画展はかなり反響があり、多くの市民、議員さんからの問い合わせもあった。結果その活動を建築学会等の専門家だけの範囲にとどめず、広く市民グループとして様々な人々の参加できる活動にしていこうという声が集まり、7月9日に市民グループで旧岐阜県庁舎の保存再生を進めていく「िकास(旧)県庁舎の会」が誕生することになる。िकास(旧)県庁舎の会の最初の活動として7月23日(金)の夜、柳ヶ瀬あい愛ステーションで旧岐阜県庁舎の活用を考えるワークショップを開催することになった。40名ほどの参加者があり、5つほどのグループに分かれてグループディスカッションを行い、様々なユニークな

活用アイデアが出されることになった。

8月初めに岐阜市の新図書館に関する市民のパブリックコメント提出の機会があり、建築学会岐阜支所、िकास(旧)県庁舎の会でも意見提出を行うということでコメントを作成し、提出した。旧岐阜県庁舎保存の意義、県と市で共同で計画に取り組む必要性などにも触れており、旧岐阜県庁舎保存問題の背景を考える上でわかりやすい資料なので建築学会岐阜支所のパブリックコメントの全文を掲載する。

「日本建築学会東海支部岐阜支所では、2月4日岐阜市長宛に岐阜県総合庁舎の保全・活用の要望書提出をした。また6月6日～13日『旧岐阜県庁舎+医学部跡地の保全活用計画展』(てつめいギャラリー)を開催する中、6月9日岐阜市長宛に『旧岐阜県庁舎+医学部跡地の保全活用』の意見書提出した。それらの経緯を踏まえ、今回の岐阜大学医学部等跡地整備基本計画(案)に対する、意見書を提出する。以下、意見の内容を記す。

①今回の計画の岐阜大医学部跡地の隣地に、県都岐阜の顔ともいえる旧岐阜県庁舎(大正13年、設計顧問矢橋賢吉、佐野利器)の名建築がある。その建築の保存活用に全くふれることなく、第1期整備計画の複合施設(図書館・展示ギャラリー・市民活動交流センター)の建設を構想するのは、大きな問題である。

②旧岐阜県庁舎は正面の玄関ホールや階段室等のデザインに見られるように、日本近代の第1級の建築遺産である。その空間を県との連携のもと第1期整備計画の複合施設の一部に活用することができれば、他に類を見ないユニークな建築物となり、岐阜市市民の誇りとすることができると考える。せっかくの貴重な空間が活用できる状況にあるのであるから、積極的な活用デザインを実施計画に盛り込むべきである。これは、複合施設の設計者を選定し、事業をすすめていく今後のプロセスの中でも、十分取り込んでいくことが可能な要素である。その検討を強く要望する。



図8 2010年7月の第1回ワークショップ

③岐阜県は旧岐阜県庁舎の建築、文化財的価値を考量し、その建築の保存（部分保存とはいえ）を方針表明にしていると聞く。しかし今回の岐阜大学医学部等跡地整備基本計画（案）の実施と関連し、旧岐阜県庁舎の保存修復活用の具体的な事業計画は全く示していない。もし第1期整備計画の複合施設の事業が進むなか、旧岐阜県庁舎が活用もされずにそのまま放置されるならば、県都岐阜の顔ともいえる地域のまちづくりは大きな問題を生じることになる。

④周知のように岐阜県は非常な財政難の状況にあり、その整備に関する資金面で大きな課題があるようである。市と県で所轄が異なるとはいえ、今回の岐阜大学医学部等跡地の計画は、岐阜中心市街地に残された最大規模の土地の開発であり、なんども言うが岐阜市の顔となる地域の構想である。市と県で協調し、県都の都市景観、文化政策に関わる大きなテーマを将来に禍根を残さぬ計画で実施していただきたい。

⑤将来、旧岐阜県庁舎の保存活用事業が今回の第1期整備計画の実施とは一連の事業とはならず、遅れて事業化される時、その活用計画は旧岐阜県庁舎の建物の価値、性格からして文化的な施設が中心となることが予想される。その時、今回の第1期整備計画の機能の一部（展示ギャラリー・市民活動交流センター）とは、機能的に重複することも十分予想される。従来、市と県が類似機能の施設を重複して建設し、その活用が十分なされないケースも生じている。行政施策の無駄を省くことが、これからの我が国の主要方針となりつつあるなか、そのような無駄の生じる計画は大きな問題を残すおそれがある。」

市民や建築学会等から寄せられたパブリックコメントの数は200通以上に達し、異例のことだったそうである。市のコメントとしては、パブリックコメントで市の構想に対する大きな反対意見はなかった、事業はそのまま規定方針どおりということであった。

その後8月31日に岐阜県の総務部長に会う機会があり、旧県庁舎について意見交換した。県総務部長はあの建物については建築的な価値を高く評価しており、できるならば耐震面で補強して相応しい用途に再活用したいと考えており、いろいろ調査もして計画案を検討している。しかし問題は県の財政で、ここ何年間に取り組むための予算はまったくひねり出しようがない状態だと。岐阜市の新図書館構想等の計画に際しても協議を行ってきたが、県の財政難から旧県庁舎の敷地の北側部分を市に売却することで覚え書きを交わしたと、しかし今後市の新図書館等の建設で旧県庁舎の建物を活かしてもらえる可能性があるならば、協力はおしまないとの見解であった。非常に率直に建物についての評価、県の財政問題等を語ってもらったものであった。

9月5日には第2回ワークショップが中央青少年会館で開催され、その後4時半過ぎから、旧県庁舎の玄関前で波多野有紀さんのバイオリンのソロコンサートが開かれた。バイオリンの美しい音色にうっとりするとともに、旧県庁舎の玄関が音楽を楽しむのになかなか素敵な場所であることを発見することになった。

10月14日には旧県庁舎見学会を開催した。建物内部を見学するために開館日である平日の午後であったが、40名ほどの市民の方々に参加していただき盛況であった。かつて旧県庁舎の建物に勤めていた経験のある方や父が県職員で時々この建物にきた経験のある方など、数々の思い出をもった人達から、普段は入ることのできない旧知事室、旧正庁など素晴らしいインテリアが今も残る室内や大階段室の素晴らしさに声があがった。

10月30日には建築史家の石田潤一郎氏（京都工芸繊維大学大学院教授）の講演会「官の空間が語るもの－旧岐阜県庁舎の歴史的位置を考える」を市民会館で開催した。明治近代期に始まる県庁舎建築の流れの中で、どういう平面形が編み出され、その流れの中での旧岐阜県庁舎の歴史的位



図9 2010年9月の第2回ワークショップ

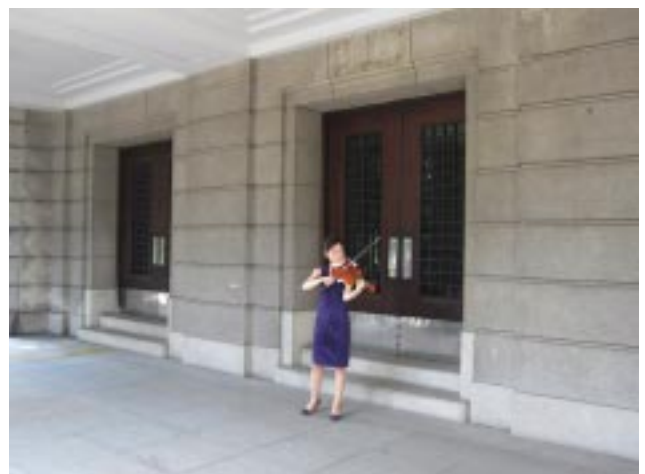


図10 2010年9月の玄関前バイオリンコンサート





図13 2010年10月の見学会での旧正庁内部



図11, 12 2010年10月の見学会での玄関前と大階段

置づけを語っていただいて、大変興味深い講演会であった。

11月2日に岐阜市副市長に会い新図書館建設と旧岐阜県庁舎の事を話し合う機会をもった。旧岐阜県庁舎保存云々は県の問題であって当事者でなく、新図書館建設計画は設計者を決めるプロポーザルが実施段階にあり、規定計画どおりに事業を進めていきたいとのことであった。



図14 2011年2月の旧加納町役場庁舎のライトアップ



図15 2011年8月の万灯会での旧加納町役場庁舎前でのコンサート

##### 5. 旧岐阜県庁舎と旧加納町役場と旧啓文社

2011年に入り、最初の活動は旧岐阜県庁舎とほぼ同時期に建てられた近代建築である旧加納町役場庁舎とのめぐり会いであった。2月2日、たまたま近くに用事があり、旧中山道の旧加納町役場の前を夕方、通りかかると建物がライトアップされ、夜の街のなかに浮かび上がっている。しばらく立ち止まって様子を見てみると、時々ライトアップの光のあて方が変わってスタッフあちこち動いて何かイベントの準備のようである。スタッフの中に写真家の桐島ローランドさんがいる。そこに通りかかった旧中山道まちづくり会の方に話を伺うと、名古屋のTV局の番組の準備であり、桐島ローランドさんをホストに東海地域の歴史的建造物をテーマにしたものであるそうだ。岐阜では旧加納町役場庁舎が取り上げられ、ライトアップして建物を普段とは違うかたちで取り上げるそうである。なかなかおもしろい試みである。旧加納町役場庁舎は武田五一設計で大正15年(1926)に竣工したもので、現在国の登録文化財に指定されている建物である。武田五一は京都工芸繊維大学の前身の京都高等工芸学校の教授を振り出しに、名古屋高等工業学校(現名古屋工業大学)の初

代校長、京都帝国大学建築学科を勤める等、関西、東海地域の建築界の父ともいえる人物である。建築の高等教育機関で学生を育てる傍ら、図案意匠に卓抜した腕をもっていた武田は、建築の設計でも明治後期から大正にかけて、名建築の数々を残すことになる。有名な名和昆虫博物館も彼の設計であるが、武田の佳作である旧加納町役場は、旧中山道沿いにあるその存在感を示す建物である。戦後の米軍による接收時に建物としては不適切な使われ方の時代もあって外観等相当痛んでいるところも見られる。数年前より、構造上の問題があるということで残念ながら立ち入り禁止状態になっている。そういう建物がライトアップされ、普段とは見違える姿を旧中山道沿いにみせたことは地域に人々にとっては、思いがけないうれしいことであった。地域のまちづくり団体である加納まちづくり会のメンバーは、旧加納町役場の建物の再生を強く望んでおり、市の協議の場で保存活用を要望してきているのである。

この旧加納町役場は2011年にもう一度ライトアップされ、その見違える姿を通りに示すことになる。それは8月13日のお盆の万灯会の時、加納まちづくり会のメンバーによる手造りのランタンが通りと建物の前庭を光で演出した。そこにイカス(旧)県庁舎の会が得意とする建物ライブコンサート企画を持ち込み、夕暮れ時にしばしジャズ・ボサノバの軽快な音色がライトアップされた建物と通りをいく人々を楽しませることになったのである。

2011年2月旧市の新図書館の設計者が伊藤豊雄氏に決まり、旧岐阜県庁舎の敷地の後ろ部分の土地を市に売却する計画も決定する。旧岐阜県庁舎は「山」型の平面にうち、後ろを撤去し前面部分を残して「一」字型で保存される方針になる。ちなみに「石川県政記念いのき迎賓館」も元は「日」型平面の建物を「一」字型平面にして再生したものである。旧岐阜県庁舎の場合、「一」字型の前面部分といっても長さは80mを越え、奥行も15m～20mあり、3階建てで規模は

かなり大きい。新たな活用策を考える方向の基本線がほぼ固まったとはいえ、その具体像についてはまだほとんど決まっておらず、今後検討すべき課題は多く、時間もかかりそうである。

旧岐阜県庁舎の保存再生活動は結論から言えば、その内容は運動を始める前と何も変わっていない。当初より全体解体の方針ではなく、前面部分の保存の方向はあり、特に成果があった訳ではない。しかし、運動が徒労だったとは思っていない。改めて、庁舎の前面部分を残す意味、特に玄関ホールから大階段にかけての内部空間の素晴らしさや玄関ホール上の生庁のインテリアの美しさなどは、再確認されたと思う。最近公開の映画「山本五十六」で中央の大階段が当時の海軍省の建物内部として撮影されたそうである。映画のロケに使われたから言うわけでないが、玄関ホールから中央大階段にかけての空間は、近・現代の建物の内部空間としてはトップクラスのものであると思う。建物や環境の保存再生の運動は陳情型のものはなかなか大きな力にならず、やはり現場の建物や環境の中で多くの市民が体験型のイベントを通してその価値や魅力を再発見する活動を通じて、はじめて大きな力になっていくものだと思う。そういう意味からも歴史的建造物の保存の運動は、街の環境を豊にしていける文化そのものであると思っている。

旧岐阜県庁舎の保存再生活動の中で行ってきた建物の見学会、再利用計画展、講演会、建物を使った玄関前での音楽ライブなどは、今後の旧岐阜県庁舎の再生の具体策の検討過程で貴重な栄養になるはずと思う。

歴史的建造物は街の記憶装置であり、人を育む環境であるということを最初に述べた。歴史的建造物保存の意味はそれだけではない。水野一郎氏は、「石川県政記念いのき迎賓館」に加え、「金沢市民芸術村」の誕生の経緯の中でののおもしろい話を紹介した。「金沢市民芸術村」は煉瓦造の紡績工場を保存再活用して生まれた金沢市の運営する演劇・



図16 2011年6月の玄関前でのジャズコンサート

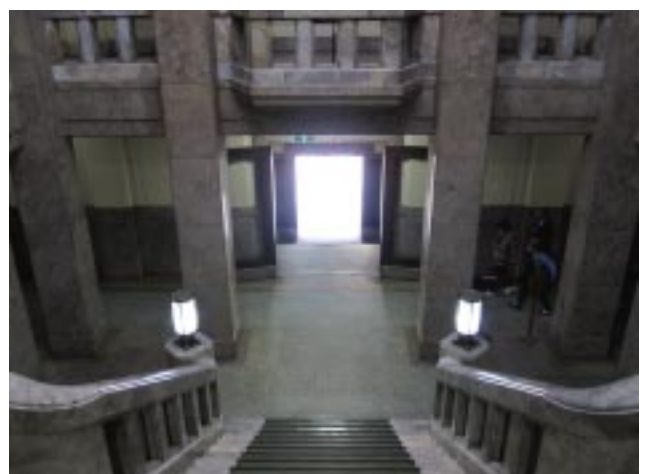


図17 映画「山本五十六」のロケに使われた大階段



舞踏、音楽、アート等の練習場であり公演スペースであるが、公共施設では珍しい二十四時間オープンの施設である。しかもこの施設は内部の床や壁などに釘を打ったり、様々な造作も可能である。公共のホールや展示空間はほとんどが壁などに画鋏も禁止されているような場所が多いなか、「金沢市民芸術村」は特別である。どうして二十四時間利用可能で壁床に釘を打てるような場所になっているのか、水野氏は元工場の歴史的建造物の再利用ということがこういう事を可能にしたのではないかと語った。管理だけの発想から自由になり、使う人の視点を取り入れることが可能になった背景には歴史的建造物のもつある種の「空間力」ともいえるものがあり、自由な発想を人々に認めさせる力になっているのではないかと話した。

歴史的建造物が街の記憶装置であるというとはその空間には、現在というある一時期の価値観だけではない、別な価値観を存在させる、そういう包含力をもつ装置であるということではないだろうか。

## 6. おわりに

2011年、旧岐阜県庁舎の保存再生活動は新たなメンバーが加わってくるとともに、旧岐阜県庁舎の保存再生だけでなく、旧加納町役場庁舎、さらに岐阜の西隣の北方町の商店街の中にある旧啓文社という大正15年(1926)に建設された出版会社の二階建ての社屋の保存再生活動という、岐阜の近代建築再生ネットワーク活動として新たな拡がりを見せることになる。

旧啓文社の建物は我々の中のメンバーがその保存活動を商店街の方々から相談されたものであるが、近年は空き家となっていた北方町で最も古いとされる鉄筋コンクリート2階建ての建物をまちの活性化の拠点として再生したというものであった。元の所有者からの寄付も受け、再生の動きは急展開する。改修工事を経て7月30日、まちづくり拠点「啓文社記念館」として見事生まれ変わることになる。町商工会青年部OBらでつくる「夢まち倶楽部」が運営し、カフェなどに活用しているが、北方町が伝説のフォークシンガー高田渡の生誕地であることから月に1度「ワタルカフェ」と称しておもしろいライブ活動も開催されるようになっていく。

実は岐阜県は日本の近代建築の中で、ビッグネームを数多く生んだ地域でもある。旧岐阜県庁舎設計顧問の矢橋賢吉をはじめ、堀口捨巳、山田守、坂倉準三、伊藤ていじ等錚々たる名前が並び連なる。堀口捨巳、山田守は明治期の様式建築を習得する時代から新しい建築運動を試行するというで誕生した大正9年(1920)の分離派建築会6人のメンバーの内の主要メンバーであり、後に堀口捨巳は著



図18 坂倉準三設計の岐阜市民会館

書「利休の茶」で茶室を建築理論として確立する一方、山田守は晩年京都タワーや武道館の設計で一般に良く知られる存在になる。坂倉準三は分離派の二人よりもう一世代後のグループに属するが、生家は羽島市竹鼻町の造酒屋である。岐阜中学から東大文学部に進むが、その後彼はフランスの建築家ル・コルビジエのアトリエに留学することになる。帰国後、日本におけるモダニズム建築の先駆者として活躍し、有名な鎌倉にある神奈川県立近代美術館はかれの傑作である。故郷羽島市にも美しい市庁舎を建て、晩年の彼が岐阜市に残したのが岐阜市民会館である。この岐阜市民会館が建築後40年を経過し、ホールの音響や舞台裏の問題など使いかたで問題があると言われ、移転建て替えなどの声もチラホラ聞こえるようになってきているのである。残念なことである。

早期発見、早期対策が歴史的建造物保存運動を成功させる決め手である。6月11日にモダニズム建築研究で著名な京都工芸繊維大学大学院教授松隈洋氏を招き、講演会「地域資源としての近代建築と坂倉準三の仕事」を開催した。まだ火の手のあがらないところで、先手を打って岐阜市民会館の建築的価値をアピールする活動をおこなった次第である。歴史的建造物保存運動は地域の建築文化を再発掘の試みでもある。日本の近代建築運動の中で岐阜が生んだ矢橋賢吉、堀口捨巳、山田守、坂倉準三等、ビッグネームの建築家達をめぐる旅をこれからも続けていきたいと考えている。

(提出期日 平成24年1月11日)